

# 《月々の手入れ》

## 【11月】

金沢バラ会  
日本バラ会  
上野耕司

11月は、冬型のはしりが始まり、風雨の強い日があると葉が強い風で傷んだり、雨で蕾が開かなくなったりして、天気次第で秋のバラは終わりになります。「バラの栽培年度末」となります。

1年の反省と来季への準備・計画の月となります。反省の項目としては①肥料の問題②剪定の問題③消毒の問題④花の歩保護・管理の問題等があります。

### 1. 肥料の問題

昔から標準として年間1株当たり「チッソは30g、リン酸は90g、カリは30g」を施すと言われてきました。

この量を一度に与えたとすると、白根が肥料成分を吸収しきれず、逆に白根の水分が肥料の方に吸い取られて、根の組織が壊されてしまいます。ですから、この量をどのように分割し、バランスさせて与えるか、問題なのです。私の実施している例では、

○来年1年のためと ○春花のために	12月～2月に元肥としてリン酸・カリを多目に含んだバッドグアノ・有機草木灰3:1を年間の2/3～1/2の量を施す。 堆肥は1年分施すこともある。
○元肥を入れなかった場合	仕方なく3月～4月に追肥で補う 堆肥等も施さないとあまり良い花は期待できない
○シュートの発生と ○株の生育を促すため	6月～7月に夏の元肥として冬の1/2～1/3の量を施すが、新苗～2年苗まではチッソを多目に意識し有機ボカシ肥料を施す。3年以上の地植えHTでは少な目に施す。
○秋花のために	6,7月と同時に混合しても良いが不足するリン酸分をバッドグアノで追加して補う。

このようにバランスよく肥料の量と成分をコントロールして施肥すれば、今年のバラはほぼ満足したものだったはずです。

勿論、土壌の状態、灌水の仕方、その他環境の問題もファクターとして

影響がありますが、施肥だけをピックアップして考えれば以上のようになります。

◎細いシュートが5本も6本も出たり、うどん粉病になりやすかったり、蕾がなかなか開かなくて、腐ってしまったたりした場合は「チッソ過多」だったと反省されます。自分の植えてあるバラの顔色をよく見て反省点を見出してください。

◎開花時、花卉の伸びが悪く、赤いバラの色がブルーイングしたり、花の芯が同心円にならず丸くかぶって坊主頭になったり、花の芯が乱れたり、団子のようになったり等々が多く見られたら、総じてチッソ過多、水分過多であったといえます。

◎チッソ過多の次に失敗するのは、安易なカリ分補給です。

生育期間中に、例えば化成肥料の硫酸カリで補給しようとして、失敗することがあります。枯れることはないにしても、成長がピタリと止まり、シュートの出も悪くなったりします。草木灰についても同様で、少量を施すにとどめるべきです。カリ分は花をきれいに咲かせるために必要だと市販の本に書いてありますが、強いカリ分は冬以外追肥しないことです。有機ボカシ肥料に含まれている少量のカリ分で十分です。

◎施肥はなるべく薄く、小まめにが原則です。何故なら、肥料成分を吸収する白根は非常に弱い組織ですから、濃い肥料成分が来ると根の水分が濃い肥料の方に吸い取られて、たちまち壊れてしまうということをおいっつも念頭においてください。

◎最後は人の言うことや市販の本を鵜呑みにしないで、自分の庭であなたが咲かせたバラの花を春、秋とよく見て、その出来具合により施肥の量と時期を掴んでください。

## 2. 剪定の問題

### (1) 春の剪定

極端に言えば春は何処で剪定しても芽が出ますが、勿論良い芽（良い花が咲く芽）は昨年8月中旬までに出たシュートに期待されます。

そのシュートを深く切るか？（強剪定）、浅く切るか（弱剪定）？が第一の問題です。結論はHT（四季咲き大輪）やFL（四季咲き房咲き系）ではシュート・ピンチつなぎの1段目か2段目の中央部分で剪定することになります。

木が元気であれば浅く切る（弱剪定）のが生理的に考えて合理的ですが、あまりにも浅く枝の先端近くで剪定すると花の位置が人間の背の高さより高くなり、花のお尻を見るようで管理が大変不便になります。また、木自身が頂芽優勢ですから、先端だけ大いに茂り、その後のシュートの出が悪くなる場合があります。

このように春剪定はその後のシュートの出にも影響を及ぼすの

で、自分の庭で日ごろよく観察して、品種の特性を掴んで剪定することが大切です。

## (2) 秋剪定

◎秋剪定は今まさに生育中の時に剪定するわけですから、出来るだけ成長点近くで剪定することが原則です。樹高が高過ぎて、管理上困るので、予備剪定をして引続き本剪定をするが決して強剪定とならないよう注意します。強剪定をしてしまうと、生理的に反し、木をいじめてしまうから良い結果は得られません。

◎秋剪定の前に細枝、フトコロ枝、3年以上経った古幹枝等は日頃から見回って除去しておくことが大切です。6,7月に述べた整枝を実施することです。

## (3) 消毒の問題

◎消毒の目的・時期を明確につかんでおくことです。真面目に1週間から10日おきに定期消毒することは、大変な苦勞ですし、消毒のやり過ぎは生育を阻害するし、環境・人体にもよくありません。

地域、季節によって病害虫の発生傾向が違うでしょうが、バラの大敵は何といても6月～7月、9月の黒星病と5月～9月のハダニです。黒星病を出してしまったら葉を落とし、そのシーズンの花期待できません。

◎ダイセン類、オーソサイド、ダコニール、キャプタン類(サプロールは治療剤なので、頻繁に使わない方が良い)等で防止できます。黒星病を出してしまったということは、手入れに手抜きがあったということで、反省すべき点でしょう。病害を防ぎ気を丈夫に育てることです。そうすることによりバラ作りが益々面白く、楽しくなります。

◎ハダニに対しても5月～9月に重点消毒することです。しかしその前に大事なことは冬に消毒をしてハダニを爆滅しておくことです。この2大敵に次いで若い出たばかりのシュートや秋の新芽を根元から食い荒らす「ヨトウムシ」、場所によっては「クキバチ」です。

うどん粉病では休眠期の冬にしっかり消毒を行うことです。冬の消毒は1,2月に石灰硫黄合剤又はマシン油を使用します。間違ってもこれらはシーズン中(3月～11月)に使用してはなりません。

このように見ても、消毒の問題より以前に「バラを愛し常に見回り、バラの顔色を伺い、バラと会話すると」ということです。これがバラを丈夫に育て、良い花を咲かせる基本姿勢です。「肥料」

のこと「水」のこと「病気」のこと「害虫」のこと等が刻々読み取れてバラと会話することができるようになるのです。

#### (4) 花の保護・管理の問題

以上のように、基本的な各種栽培技術を適正に実施していくことにより、バラの木は順調に生育していきます。

しかし最後の最大の目的であるバラの花をきれいに、立派に咲かせるには更に以下のこと一工夫が必要になります。

●風通し、日照を良くし、水はけをよくすることは非常に大切です。南向きの庭では、乾燥を防ぐために夏のマルチングは効果があります。

●花が開花する直前は、雨・露を避けることが肝心、逆に花を覆い過ぎて日照不足になると本来の花色が出なくなります。

●株の深植えをしないように!! 深植えはシュートの出を非常に悪くします。

●同じ品種は同じ場所に植えると管理しやすくなります。(そのかわり失敗する時も同じにやられますが)

以上のように今年も色々と反省することがあったと思います。

市販の栽培書を参考にし、先輩の意見を聞いて、その地域に合った栽培法を知ることは、まず、第一に必要ですが、最後は自分の庭で、自分に合った栽培法を身に着けることです。そうすることによりバラと自分が心技一体となり、バラづくりの楽しさが増してくるものです。

### 3. 肥料について

#### (1) 肥料の3大要素

○チッソ (N)・リン酸 (P)・カリ (K) の3大機能

N=実らす・P=良くする・K=丈夫にする

#### (2) 一般の市販されている肥料成分の見方

市販の有機ボカシ肥料の場合N=3.4、P=4.5、K=2.5の表示があるこれは肥料100g中にN=3.4g、P=4.5g、K=2.5g含まれているということです。

#### (3) バラが年間に必要とされている量はN=30g、P=90g、K=30gとされています。

#### (4) 冬肥料投入量の実際

使用する肥料資材の種類と成分

各素材の含有率	チッソ(%)	リン酸(%)	カリ(%)
有機ボカシ肥料	5.8	5.7	2.7
発酵鶏ふん	2.7	5.5	3.5
バッドグアノ	0.07	25.0	0.21
草木灰	0	1.0	20.0
堆肥	0.5	0.2	0.5

冬の元肥施肥量

肥料の素材	施肥量	内チッソ量	内リン酸量	内カリ量
バッドグアノ	240 g	240× 0.07%=0.17g	240× 25.0%=60.0 g	240× 0.21%=0.5 g
草木灰	100 g	0	100× 1.0%=1.0g	100× 20.0%=20g
堆肥	5000g	5000× 0.5%=2.5g	5000× 0.2%=1.0g	5000× 0.5%=2.5g
HT等合計 比率		2.67g 0.12	62.0g 2.70	23.00g 1.0
FL・つるバラ 等房咲き系追加 有機ボカシ肥料	200 g	200× 5.8%=11.6 g	200× 5.7%=11.4 g	200× 2.7%=5.4 g
房咲き等合計 比率		14.27g 0.5	73.4g 2.58	28.4g 1.0
年間施肥量に対 する不足量		15.73g	16.6g	4.0g

(5)夏の元肥投入量の実際

夏の元肥施肥量

肥料の素材	施肥量	内チッソ量	内リン酸量	内カリ量
有機ボカシ肥料	250 g	250× 5.8%=14.5 g	250× 5.7%=14.25 g	250× 2.7%=6.75 g
年間施肥合計		30.23 g	108 g	36.84 g
比率		1.0	3.5	1.20

(6) 更なる施肥の工夫

バラ栽培の経験と共に、我が家の環境に即した栽培法の工夫をしていくことになります。

- ・耐病性を考慮しつつ、ちっ素成分を以下に効率よく施すか
  - ・リン酸成分を以下に充足させるか
- 等がポイントとなる。

(7) バランスよく育て、処理する。(古幹枝の切除、整枝)

シュートは5月下旬ごろから出始め、それらは7月には、ピンチ3段目になっているものもあります。シュートの3段目のピンチが終わった時点で「古幹枝一本を根元から切除」します。このように成長したシュート(新しい主幹枝)一本につき、古幹枝一本をバランスよく切除していくと、株に大きなショックを与えず、新旧交替させることができます。

但し、シュートがたくさん出たからと言って、古幹枝の除去をシュートの本数と同じ本数を一挙に除去するのではなく、一本除去するごとに次は10日間は空けてください。

成長期には葉を一枚も落とさないように気を付ける反面、弱小枝やフトコロ枝は風通しを悪くし、病原菌を呼び込むことにもなるので、毎日見回る時にショックを和らげるためにもポツリポツリと取っていきます。

(8) 日照を和らげる

7から8月の暑さを如何に切り抜けるかは、バラにとって大問題です。夏でもバラが病気にもならず、シュートも成木あたり2~4本出ており、元気に生育しているなら、あなたの栽培技術も上級の域に達したといえるのではないのでしょうか。